ニュー・クリティシズムとコールリッヂの批評精神

岡本昌夫

今日アメリカの批評界を代表し、その主流と目される流派は New Criticism とよばれる一派であることは、既に周知のところである。二十世紀初頭に於ては、Brownell, Babbitt, P. E. More などの New Humanism の批評が圧倒的な力を持ち、今日尚その人々の業績のあるものは価値高きものとして学界に於て尊重されてはいるが、それらは既に過去のものと考えられ、批評のクラシックスとされてしまった。

又一九三〇年代には、カルヴァートンやグランヴィル・ヒックスなどの左翼主義批評が華やかに登場して、全面的に左翼的色彩を濃厚にしたアメリカ文学の現実に対応して、強く人々の注目を引いたが、これもアメリカ社会並びに文壇（或る意味ではアメリカには日本流の文壇はないとも云えるが、文学界一般乃至文学者の総合的傾向と云う意味では文壇といって差支えなかろう）の変遷に伴って、今日ではその影はうすれ、その影響力は到底昔日の比ではない。

ニュー・クリティシズム（「新批評」という訳語はこの流派に対する語として未だ十分に熟していないようである）は上に述べたようにアメリカを中心とする文学運動であると云ってよいと考えるが、イギリスに於ても同様の傾向があり、エリオットやリチャーヅなどこの運動の根源となった人々がイギリスの批評家として活躍しているばかりでなく、F・R・リーヴィス、エムプスン、ジョン・ウェインなど、この派に属すると考えられる批評家が少くないのである。

（この派の人々の書きものによると最近のドイツ（西独）フランスにもこの傾向が有力であるとのことであり、これは比較文学的に見て興味ある研究対象であると思われるが、当面の問題ではない。）そしてこのニュー・クリティシズムを問題とする時、英米を判然と区別して語ることが困難な場合があり、常に両国の批評界を考慮に入れねばならぬのであるが、今はアメリカを中心に話を進めて行き度い。

ニュー・クリティシズムと云う言葉は、「歴史批評」、「印象批評」などのように、批評の本質を示す何ものをも持たないわけであって、これに対しては既に批判が行われ、オカーナーなどは、「分析批評」（Analytical Criticism）といった方がよいと云っている。[1] その言葉の曖昧性に伴い、その批評の主ニュー・クリティクスの範囲も曖昧であって、論者によって可成りの相違があるのであるが、筆者はこれを出来るだけ狭い範囲に止め、ランサムの主宰する *Kenyon Review* によって評論を発表する人々（この故にこの派の人々は時にケニヨン派と呼ばれることがある）に止めたいと思う。その人々の主なるものは次のような人々である。

ブラックマー Richard P. Blackmur (1904–), Princeton University
ブルックス Cleanth Brooks (1906–), Yale University
バーク Kenneth Burke (1897–), Bennington College
ランサム John Crowe Ransom (1888–), Kenyon College
テイト Allen Tate (1899–), New York University
ウィンターズ Yvor Winters (1900–), Stanford University

これらの人々はひとり *Kenyon Review* に筆を取るばかりでなく、*The Sewanee Review*, *The Hudson Review*, *The Hound and Horn*, *Poetry*, *The New Republic* などの文芸誌に広汎に活躍し、アメリカ批評界をリードしているといってよいのである。

尤も今日これらの人々の他に有力な批評家がないわけではない。例えば Ronald Crane を中心とするシカゴ学派の人々などは見逃すことは出来ない。[2] この派の人々は、アリストテレスを初めとして古今の文芸批評家の作品を綿密に検討し、誠に手堅い研究論文を発表し、或る点ではニュー・クリティックスに共通するものがあるけれども、或る点ではニュー・クリスティックスに対立し、これを批判しようとするものであるから、今はこの流派を論外に置く。

この他、一九三〇年代の初めに名著 *Axel's Castle* を公にした Edmund Wilson や、一九四〇年代の初めに *On Native Grounds* を著してアメリカ小説の批評に新生面を開いた Alfred Kazin や、一九五三年に名著 *The Liberal Imagination* を著した Lionel Trilling などは何れも優れた批評家であって、注目すべき人々であるけれども、今私はこれらの人々をニュー・クリティックスから除外したいと思う。

× × ×

ニュー・クリティシズムと云う名称が、これらの人々の批評に与えられたのは、一九四一年ランサムが *The New Criticism* と題した評論集を出版してからであると云われている。[3] 一九一一年 J. E. Spingarn も同名の著書を公にしているが、この書物は内容的にはニュー・クリティシズムの系統であるといってよいが、時代的に少し早過ぎるし、今日のニュー・クリティシズムとの結びつきもそれほど密接ではない。ケニヨン・レヴュの編輯者ランサムの書名をその起原とする説が妥当であると考えられる。

然しこれはただ名称の問題であって、ニュー・クリティシズムそのものの起原は、も少し先に遡ることが出来る。ケニヨン・レヴューは一九三九年に発刊されて居て、その創刊以来同系統の理論が発表されて来たことは云うまでもないが、この雑誌には更に *The Southern Review* という前身があって、後ケニヨン・レヴューに加わった Allen Tate, R. P. Warren, Muriel Rukeyser などの人々が編輯或は執筆していたのである。このザ・サザン・レヴューは一九三五年創刊であるから、ニュー・クリティシズムは一九三五年ころから其の機関誌を持ったと云えるのである。単行書の出版

を見れば、一九三〇年にはランサムは *God Without Thunder* を一九三一年にはケネス・バークが *Counter-Statement* を出版しているから、ニュー・クリティシズムは一九三〇年以後アメリカに於て登場し、三五年以後四〇年代、五〇年代に於て多くの名著を世に送り出すこととなったのである。

ニュー・クリティシズムの精神をイギリスにたどるならば、我々は更に二〇年代或はそれ以前に遡らねばならない。T・S・エリオットの *The Sacred Wood*, 1920 やI・A・リチャーヅの *Principles of Literary Criticism*, 1925 はニュー・クリティシズムの先駆と呼ぶことが出来よう。更に遡ってT・E・ヒュームに至ることも出来るが、我々は大体、エリオットとリチャーヅをニュー・クリティシズムの先駆と云ってよいと思う。

然らば、ニュー・クリティシズムとは如何なる批評を云うのであろうか。如何なる態度或は方法による批評精神であろうか。又如何なる意味に於て、エリオットやリチャーヅをその先駆と呼び得るのであろうか。

× × ×

ニュー・クリティシズムの特質を一言にして云い尽すことは困難であるが、先ず第一にそれは十九世紀的なロマンチシズム、印象主義、歴史主義などの伝統的批評精神を打破して、文字通り新しい立場に立って、作品そのものを芸術学的視野に於て見ようとするものであるということが出来る。文芸作品をその作家の必然的産物と見て作家の生い立ちや環境に好奇の目を見張ったり、作品を歴史的社会的産物と見てその背景に拡大鏡をあて、以てその作品の性質が明かとなったと考えたりするのではなくて、文芸作品そのものを、文学として、芸術として深く見つめ、その内容を知的想像的に理解し、その構造を内容との関係に於て把握し、分析し、哲学的に考察し、その表現を心象的に深く検討することによって、作品の持つ文学的価値を明かにしようとするものである。今迄の文学批評は、ややもすれば、文学そのものを離れて、その作者や環境に目を向け、作品の本質を去って、その周辺のみをかけ廻って居たのに反して、作家やその背景を一応作品と切離し、文学作品そのものをありのままに客観的に見つめ、その本質の把握に専念しようというので

ある。

この考をいち早く述べたのはエリオットであって、一九二三年の論文「批評の職能」の中に於て、「大ざっぱに云えば、批評は常に、芸術作品の解明と趣味の訂正という当面の目的を自認しなくてはならない」[4]と述べ、又、*The Sacred Wood* 再版（一九二八年）の序文に於ても、「自分の当面する問題は詩の全体性（インテグリティ）の問題である」といい、更に「我々が詩を考える場合、我々は先ず第一にそれを詩として考え、他のものとして考えてはならない」と説明する。「詩というものは、確かに詩人の心や時代の歴史についての心理的資料の集積以上のものであり、それとは全く異ったものである」[5]というのがその理由である。エリオットの批評作品全体に、この作品中心の思想が貫ぬいていることは云うまでもないであろう。[6]

リチャーヅは文学批評の問題を言語の伝達と効果の問題に還元して、言葉の群が伝達する意味を科学的に考察することを批評と考え、それを名著 *Principles of Literary Criticism*, 1924 に於て体系ずけようとした。文学を言語の伝達の性格から科学と区別したのが小冊子ながら彼の名著とされる *Science and Poetry*, 1926 である。ニュー・クリティシズムが特に作品の構造や言語の問題に深い関心を示すのは、かようなリチャーヅの言語的関心に負うところがあるのである。

今ニュー・クリティックスの批評精神について一々詳論することは出来ないが、二三の批評家の言を引きながら、作品中心の批評態度を検討して見よう。

クリアンス・ブルックスは「傑作の壺」（*The Well Wrought Urn*, 1947）という不思議な題を持つ評論集の中に於て、ニュー・クリティシズムの取るべき批評態度について次のように興味深い言葉を述べている。「詩を先ず第一に詩として論ずるようにするということは、強調すべきことであり、又大いになすに価することである。何となれば、我々は学校で、人類学や文化史の先生について熱心に学び、その教科を充分過ぎる位に覚え込んでしまっているからである。

余りに充分すぎて、今やその危険は、我々が時代による詩の相違を忘れるというのではなく、それらが共通に持っている本質を忘れるかも知れないというところまで来ているからである。偉大な詩にそれぞれ特徴を与えている要素を無視する恐れがあるというのではなくて、反対に、それらが互に持っている密接な近似性――即ち、それらを詩たらしめる性質、それらがよい詩かつまらぬ詩かを決定する要素――が曖昧になるという可能性が大いにあるのである。[7]」これは、詩に関する諸々のことが問題となって、肝心な詩の本質が忘れられようとしていると説く警世の文字であるが、この詩の本質に迫ろうとする態度がニュー・クリティシズムの根本的態度である。

同じ批評態度は、ブラックマーによって「批評家の仕事」なる論文のうちに於て、「批評は撤頭撤尾、読まれるままの詩、表現されたものが感ぜられるままの詩を問題にしなければならぬ[8]」と述べられ、ジョン・ウェイン（最近イギリスの批評界に慧星の如く現われその将来を嘱目されている）によって、「私は詩人よりも詩を重視し、詩人に奉仕するよりもむしろ詩に奉仕しようとする」と云われ、又「一篇の詩は、作者を離れてそれ自身の意義を示さねばならない[9]」とも述べられている。ケニヨン・レヴュ――の編纂者にしてニュー・クリティシズムの中心人物と考えられるランサムは、詩は詩独自の本体を持つと主張して、いわゆる‘ontology’の説を唱えている人であるが、この思想の中心はやはり、「批評家の注意の焦点は文学作品それ自体に置かれねばならない」と云うことであり、「批評は文学の美学或はその特質的価値を明確にし、享受しようとする試みである[10]」と考えるのである。

かようにニュー・クリティシズムの第一の特徴が、文学作品そのものをその本体に於て見るということであるとすれば、その文学作品をその本体に於て見るとは一体如何なることであろうか。その具体的な見方は如何なる見方であろうか。

文学作品をその本体に於て見るとは、作品の原典を第一義として、それを綿密に読むことから初まる。所謂、‘close reading’によって原典の意味を充分に把握し、それを知的に分析批判し、その作品の形式と内容の結合や関連の関係

を考え、作品の構造や形式を検討し、純粋に文学的な規準に立ってその作品の価値を判断しようとするのである。即ち作品をその本体に於て見るとは作品そのものの構成とその価値の批判に主眼を置くものであると云えよう。在来の文学批評と云えば、作品をその作家の伝記的事実と結びつけ、伝記的事実の解明を以て作品の解釈終れりと考えたり、又作品と作家の生きた時代や社会を結びつけ、それらの究明を以て文学批評の任務終れりと考えるようなことが屢々であったが、これらの考に反抗して、作品の主体性を保持し、それ自体が持つ文学的価値を闡明し、文学作品の再評価をしようとするのである。[11]

それはバビットやモアのニュー・ヒューマニズムの倫理的人文主義批評に対抗して、作品の芸術性を重視しようとするものであり、ヒックスやカルヴァートン等の左翼主義批評に対立して、自らを反動的と揶揄しながら、[12] 文学を宣伝の具に供することに反対して、文学本来の道に戻るべきことを主張するものであり、又パリングトンなどのように、文学に盛られた思想や主張のみを重視し、文学の歴史即ち思潮史とする見方に反対して、文学の表現形式や構造を重視し、その言語の重要性を主張しようとするものである。

× × ×

さてニュー・クリティシズムの一般的特徴は凡そ上述の如きものであるが、然らば具体的に云ってこの派の批評の方法や解釈は如何なるものであろうか。これは勿論批評家各人によってそれぞれ若干の相違があるわけであるが、その特徴を最も端的に示す典型的批評としてクリアンス・ブルックスの作品を紹介して置きたい。彼の代表作は「傑作の壺」*The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*, 1947 であるが、これは、ジョン・ダンの詩 "The Canonization" シェイクスピアの悲劇 *Macbeth* ミルトンの "L'Allegro and Il Penseroso" ポープの "The Rape of the Lock" グレイの "Elegy" ワーズワスの "Intimations" キーツの "Ode on a Grecian Urn" などの詩をテキストに即して、(そのテキストの主なものは巻末に収められている) その手法、構成、言語、性格、象徴、効果、芸

術性などを、詳細に論評したものである。

今これらの詳細に立入る暇はないが、簡単にその一つについて少しく考察を考え、ニュー・クリティシズムの実体を窺って見よう。ワーヅワスの名詩 "Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood" に関する一章 "Wordsworth and the Paradox of the Imagination" を取上げることとする。ブルックスは先ず、この詩が、長らく、ワーズワスの自伝と結びつけて解釈されて来たが、「詩というものはそれ自身独立した構造物であって」「このオードを一箇の詩として考える時どういうことになるかを見ることも興味深いであろう」[19] と述べた後、この詩全体が多くのパラドックスを用いて居ること、一貫した象徴性を示していること、そしてそれがエムプソンの云う意味の多くの曖昧性を持っていること、色々の種類のアイロニーを持つこと、等を述べ、このオードが、その立派な章句にも拘らず、詩としては必ずしも成功したものとは云えないけれども、曖昧な象徴と逆説的な叙述の用い方を認識し、その価値を認めることによって、それを弁護するのがよいと考えるという。

この詩は先ず、牧場も森も流れも大地も、わが目には、天上の光に包まれ、夢のような輝やきと新鮮さで蔽われているような時があったと幼年時の回想を語るのであるが、ここで大地は光の衣で蔽われ、次の詩節(スタンザ)の太陽、月星などの天体と対照する。これらは尾を引く光の雲を持つ光の把持者であって、地球に色々の光を与えるのである。人はこの第一詩節と第二詩節のうちに基本的対象の極が存すると云いたいところだという。

この天上の衣、光の衣は、夢の輝きと新鮮さとを持つと詩人はいう。夢というものは、屢々強烈な感情と連なる非常な明晰さを持つと共に、又屢々それは逃げ易い、捕え難いものであり、解剖したり分析したりすることの出来ぬものである。かような暗示は "dream" と "To me did seem" との押韻によって、又、それにつづく "It is not now as it hath been of yore" なる文句によって証せられるという。

第二節に於て、「空に雲なき時は、月は喜びに満ちてあたりを見廻す」"The moon doth with delight / Look

round her when the heavens are bare.” といって、喜びを以て周囲を見廻す子供を暗示する月を持出し、それが光を放ち、独自の世界を造り出すことを暗示するが、同時に、それと対照的に、「太陽は輝しく誕生する」“The sunshine is a glorious birth” と述べる。‘birth’ という字は明け方の光景を暗示する。それは太陽のコースの幼年時代であるからである。ここに於て詩人は、第五節に於ける「我らの誕生は、眠と忘却に過ぎぬ。われらと共に起き出でる魂、我らの生命の星は、何処かに沈んでいたが、今遠いところからやって来たのだ。」“Our birth is but a sleep and a forgetting / The Soul that rises with us, our life's Star, / Hath had elsewhere its setting, / And cometh from afar.” に対する重要な準備をしているのである。「確かに、自分の光栄の雲の尾を引きながらこの世界にやって来る子供は、自らその光輝を持って来る太陽や月に似ていることは明かである」とブルックスは断言する。かようにしてこのオードは全体を通じて、成長する少年と昇る太陽との不断の比較によって語られ、光と闇の交錯によって語られる。第五節に於て太陽と成長する少年との比較は完成され、第九節に於て、少年時代と暗黒との連想が成立する。

又第三節に於て、重点が視覚から聴覚に移行する。「小鳥は楽しい歌をうたい、少年は鼓の音に合すかのように跳びはねるが、わが胸にはただ悲しみの思いのみが湧く」“Now while the birds thus sing a joyous song, / And while the young lambs bound / As to the tabor's sound, / To me alone there came a thought of grief.” につづいて、‘A timely utterance’, ‘The cataracts blow their trumpets’, ‘I hear the Echoes ...’, ‘let me hear thy shouts’ など聴覚に関する言葉が次々と現われる。第四節も同様である。「天は君等と共に喜びを共にして笑う」“The heavens laugh with you in your jubilee” なる文句は「汝等がお互に呼ぶ呼び声を聞いた」“I have heard the call / Ye to each other make.” につづくばかりではない。赤子が母の腕にあってとびはねると語った後、その光景を詩人が目に見て喜ぶのではなくて、「聞こえる、聞こえる、素晴らしく聞こえる」“I hear, I hear, with joy I hear.” となって、聴覚を主体とした叙述となっている。

第五節以下の各節についても色々問題があるが、それはここには省略するとして、要するに、この詩は人間の心の成長、その性質、その発達に関する詩であり、リチャーヅの所謂「想像の事実」にその中心点を持つものであり、神学、倫理学、教育にふれたものであるが、強調するところは、これらにはなくて、「この詩の偉大さは、ワーヅワスがここに於て詩人の任務について語り、他に何物をもおしつけようとするものでないと云う事実に存する」[14]のである。そしてこの詩は、この主題、即ち、神への感謝にではなくて、「われらの生きるよすがとなる人の心への感謝、そのやさしさ、歓喜、恐れへの感謝」を以て終っているのである。

以上は極めて概略ではあるが、ブルックスの'Intimations'評の大筋であって、ブルックスの批評のあり方を窺うよすがとなるであろう。他の批評も具体的な問題はそれぞれ違ってはいるが、批評態度と方法は総て軌を同じくすると云うことが出来る。

ブルックスにはこの批評集の他に、共著ではあるが、*Understanding Poetry*, 1938; *Understanding Fiction*, 1943 *Understanding Drama*, 1945 (以上何れも Henry Holt & Co., New York より出版) があり、大学向の文学教科書として広く用いられ、非常な影響を及ぼしているのである。これらの書物は、作品或はその翻訳を示し、その各々に対してニュー・クリティシズム的論評を加え、問題点を指摘すると共に、綿密に考慮された'Questions'を示して、学生勉学の指針を与えているのである。

これらの詳細についてはここに紹介する暇はないが、要するに、ブルックスはこれらの書物に於て、ニュー・クリティシズムの実践を示し、学生に対して文学の研究法を示し、文学批評の実際を教えようとしたのである。これら小説や劇に関する書物をも考慮に入れてニュー・クリティシズムの特徴を更に回顧するならば、ニュー・クリティシズムは、作品中心の批評であることを第一義として、作家の考察は第二義であり、常に作品の構成と効果を考慮しつつ、主題のあり方を考え、作中人物と筋書或は事件との結びつきを考え、事件に対する作中人物の反応、或は人物の事件への働き

かけの問題を考え、その人物の性格に関しては、それが型に終っているか、象徴となっているか、又象徴となっているとすれば、如何なる象徴となっているか、又その象徴の用い方、即ち象徴的手法の巧稚等を問題とし、次に人物の用いる言語の妥当性及びその効果を問題とすると云えよう。自叙伝詩のような場合は、作家の精神の発達と無関係には論じ難いが、然しそれでもその詩を作家個人の自伝としてでなく、一般の人間の自伝として、即ち人間精神の発展史として見ようとするのである。かくすることによって、作品を作家と離れた作品自体として見ることが出来ると考えるのである。又簡単な叙情詩のような場合に於てもやはり、その詩を一つの独立した作品として、作家の一時的な叙情としてではなく、人間の叙情として、その人間的価値を考慮しようとするのである。この場合詩の言語の問題は更に重要性を増し、考察の主要部分を構成する。

次にニュー・クリティシズムに於ては、作品相互の比較研究がなされるが、これは、同類の或は対立的な作品を比較検討することによって問題とする作品の本質を明かにしようとするのであって、従来の歴史主義に立つ影響論ではないことを注意すべきであろう。

× × ×

以上によってニュー・クリティシズムの特徴或は本質を暗示し得たと考えるのであるが、この批評は、時に、入門的作品解釈と誤解され、'Interpretation'であって、'criticism'ではないとの非難を受ける。これはせいぜい高等学校の文学教育には望ましいが、大学教育に於ては既に限界があるのではないかとの声が既に上っているのである。一九五五年五月十五日 W. H. Auden は *The New York Times Book Review* に於てはっきりとこの点を指摘し、「本質的に云って、ニュー・クリティシズムは人間を訓練して注意深く読むことを教えようとする試みであって、われわれの時代のような写真と漫画の時代にあっては、青年に取ってこれ以上必要なものはない」と皮肉交りの讃辞を呈した後、「自分は総ての公立学校や高等学校でニュー・クリティックスが居ることを喜ぶが、大学程度に於ては、こういう研究

法にはゆゆしい限界がある」と述べ、その主なる理由として「歴史的文脈を全然無視することは、すっかりそれに集中することと同様に完全な誤である」と断じているのである。

誠にオーデンが云うように、ニュー・クリティシズムには、或る程度の偏向は認めねばならず、これを「完全な批評」と云うことは出来ぬかも知れぬが、完全な人間がいないように、完全な批評というようなものは考えられないのであるから、たとえ一面的のそしりはまぬがれぬにしろ、それがその時代に対して意味を持ち、前代の批評を矯正し、将来のために役立つものであるならば、当然存在理由があるのであり、われわれもまたこれを研究する理由があるのである。

ただそれだけではない。よく考えて見るならば、ニュー・クリティシズムはただ時代の要求を満足させると云う一時的性質を持つだけではなく、深く批評の本質に合致するものであるといえるのである。文学批評の本質とは、文学作品を先入主なく、あるがままに見て、その意味を分析批判し、結局その作品の公平な評価をなし、批評を通じて、将来の文学の創造に参与しようとすることである、と云うことが出来ると考えるが、この定義にして誤りなしとすれば、ニュー・クリティシズムは批評の本道を行くものであって、単に時代の要求を満すだけのものではないのである。

ニュー・クリティシズムが、文学の価値判断ということに如何に重点を置いているかはニュー・クリティックスの論文の至るところに窺われる。ブラックマーは先にも引用した論文「批評家の仕事」に於て、特にこの点にふれ、「詩の批評は、形と意味の移動がなされる条件と様式と共に、――曖昧な陳腐な文句を用いれば、内容と形式の関係を問題としなければならない。即ち、人間的或は道徳的価値の確立と鑑賞を問題としなければならない。」[19]と述べ、詩の批評が、詩の内容と形式の関係を問題とすると同時に、それを通じて、価値の問題に没頭すべきことを説き、「形式と価値」が彼の最大関心事なることを示さんがために、彼の著書に“Form and Value in Modern Poetry”なる題を与えたのである。

文学の価値判断ということになると、必ずそこには価値判定の規準が想定されねばならない。規準なしには如何なる批評家も作品の価値を判定することは出来ない。然し、その規準は決して物尺の如く万人に取って一定不変なものでも

なく、単純純一でもない。それは現象的に複雑微妙にして変転して止まぬものであって、批評家によって常に建設され、発展せしめられて行く性質のものである。然し批評家は常にその絶対性及び不変性を信じ、その規準の確立を自己の任務とすると共に、その妥当なる適用を期さねばならない。イギリスのリーヴィスやアメリカのテイトは、特にこの点に深い関心を示している。[16] テイトは「現代世界に於ける文人」なる論文に於て、文人の批評的責任は「文学的規準の再建とその適用である」[17]といい、その任務は「言語の純粋性と現実性とを保持することである」[17]と述べているのである。かようにニュー・クリティシズムの批評家達が、確乎たる文学的規準の再建を志し、その正しい適用によって、真に有意義なる文学批評を行おうと努力していることは、確かに批評家の本義をわきまえたことと云うべく、真剣な批評家の態度をここに見出すと云えよう。これこそ英国批評の伝統をつぐものであって、私はこの点に於てニュー・クリティシズムを現代英国批評の祖とも云うべきコールリッヂと結びつけずには居られないのである。

× × ×

ニュー・クリティシズムの系譜をたどって、或る者は、その起源をリチャーヅ、エムプスンに求め、[15] 或る者はポーやスピンガーンに求め、[19] 又或る者はヒューム、パウンド、エリオットに求める。[20] 私は更に遠くコールリッヂにその根源を見出そうとする者である。

ポウにその起源を見出そうとする者は、ポーがかの有名な詩論に於て、文学作品の効果(エフエクト)の問題を論じている点を取上げるのであるが、そのポーの詩論がコールリッヂを出発点としていることは周知のところであるから、[21] ニュー・クリティシズムの起源をコールリッヂに求めることは、あながち牽強附会ではないのである。

それだけではない。ニュー・クリティシズムの人々が如何にコールリッヂに負うかは、彼等の著書が明かに示しているのであって、彼等はこぞってコールリッヂを尊敬し、研究し、又屢々その言説を引用して自説を補強しているのである。

ニュー・クリティシズムの先駆たるT・S・エリオットは、その著 *The Sacred Wood*, 1920 の巻頭論文「完全なる批評家」"The Perfect Critic" に於て、「コールリッヂは恐らく英国最大の批評家であり、或る意味に於て最後の人であった」[29] といい、コールリッヂに最大の讃辞を呈しているのであるが、*The Use of Poetry and the Use of Criticism*, 1933 に於て更に詳しくコールリッヂの批評家としての能力を評価し、その説を詳論しているのである。[29] エリオットは実にコールリッヂの再評価をやり初めたといっても過言ではなく、この人の故に批評家コールリッヂの価値が見直されたといってもよいのである。エリオットの現代批評壇に於ける地位を考える時、この人のコールリッヂ観が如何なる影響を及ぼしたかは想像するに難くない。次にニュー・クリティシズムのもう一人の先駆、I・A・リチャーズもまだ大のコールリッヂ党であった。彼の *Coleridge on Imagination*, 1934 はコールリッヂの批評を想像力説に結集して、その構造を論じたものであるが、彼の主著 "*Principles of Literary Criticism*, 1926 も亦コールリッヂの所説、殊にその想像力説には多大の考慮を払っての著作であるということが出来る。この二大家の他、イギリスに於ては殊に Herbert Read と D. G. James、アメリカに於ては René Wellek（元チェコ人）は優れたコールリッヂ学者であり、何れもコールリッヂを中心とした著書を公にしているのである。[24]

これらの人々は広い意味に於ては、所謂ニュー・クリティシズムに属する人々であり、少くともその先駆というべき人々であるから、ニュー・クリティシズムが、コールリッヂと深い関係に立つことはこれ以上喋々する必要はなかろう。

然らば具体的に云って如何なる点がコールリッヂとニュー・クリティシズムの類似点であろうか。否如何なる点に於てニュー・クリティシズムはコールリッヂに負うのであろうか。この点について詳しく考慮するためには、少くとも以上ニュー・クリティシズムについて述べて来た程度にコールリッヂについて語らねばならないのであるが、ニュー・クリティシズムが今日一般に殆んど知られていないのに反し、コールリッヂの思想は広く英文学徒の常識となっている点

に鑑み、コールリッヂについては、その批評精神の特質を極く簡単に概括するのみで話を進めたいと思う。

コールリッヂの批評の特質は先ず第一に作品そのものの批評であるということである。例えば、コールリッヂのワーヅワス批評を取上げて見るならば、コールリッヂはワーヅワスの詩の短所と長所とを五六個条ずつ挙げて具体的に詳論しているが、これは明かにワーヅワスの作品そのものに即した批評であると云うことが出来る。そしてそれは作品の言語に関し、文体に関し、その思想と情緒の意義に関し、その心象と叙述に於ける自然らしさに関し、想像力の豊けさに関して考察されたものである。[25] 即ちコールリッヂの批評は、作品そのものについて、その内容と外形の両者を全体的に考察し、その本質を把握すると共にその性格を分析批判し、進んでその文学的価値を明かにしようとするものであるということが出来る。その方法は直観的であると同時に科学的哲学的であり、常に想像力という原理に立って、原理的に批判しようとするものであることは、上のワーヅワス評のみについても窺われるが、その主著 *Biographia Literaria, Lectures on Shakespeare* を詳細に検討するならば、更に納得がいくことであろう。コールリッヂの批評作品が批評史上重要視される意味は、彼の批評が、前代の伝記主義の批評と違って、作品そのものの本質に迫って、その価値を検討するところにあり、又、その間に批評の規準を示すと共に、創作の原理をも示すものである点にあるといってよかろう。

ニュー・クリティシズムの主張及び実践が、このコールリッヂの批評精神に通じるものがあることは、以上の簡単な説明によっても窺い得るであろう。誠にニュー・クリティシズムの人々は、明かにコールリッヂに学ぶところがあると考えられるのである。例えばクリアンス・ブルックスは、先に述べた *The Well Wrought Urn* の第二章に於て、特にコールリッヂの *Biographia Literaria* に於ける *Venus and Adonis* 論を取上げ、それをニュー・クリティシズムの方法に合するものとして註釈を加えているのである。

ニュー・クリティシズムがコールリッヂに学ぶところは決して一二に止まらない。芸術創作の原動力としての想像力

に関する考え、文学作品の構造の解明に役立つものとしての言語と心象についての概念、想像力と知性、言語と伝達等についての考えなど、多かれ少なかれ、コールリッヂに学ぶところがあるように思われる。色々の意味に於て、現代の批評家がコールリッヂと共通なものを多分に見出し、「今日の批評はコールリッヂの直系である」ことは、エリオットが近著 *On Poetry and Poets* に於て述べている通りである。[26]

以上によって私はニュー・クリティシズムの凡その性格を明かにし、それがイギリスの大批評家コールリッヂに負うところがあることを示したつもりであるが、最後に附言したいことは、ニュー・クリティシズムが、オーデンの非難もあるように、ややもすれば、作品の単なる解釈に終る危険を持つものであるとすれば、それは更にコールリッヂ其他の偉大な批評家の言説に学んで、一層高邁な、一層深いものとなることを願う者であるということである。R・S・クレーンは‘The Critical Monism of Cleanth Brooks’なる論文に於てブルックスの単純さを指摘し、その底の浅さを述べているが、この非難もまたオーデンの非難と共に一理あるところであって、その解決は将来に残された課題であろう。

注

① William Van O'Connor: *An Age of Criticism, 1900–1950*, 1952, ch. IX.

② この派の人々の評論集 *Critics and Criticism*, 1952 は優れた多くの論文を収め、世界的に高く評価された。

③ Cf. Pritchard: *Criticism in America*, 1956, p. 231. O'Connor: *An Age of Criticism*, 1952, ch. IX.

④ T. S. Eliot: *Selected Essays*, 1932, p. 24.

⑤ T. S. Eliot: *Sacred Wood*, 1928, p. viii & p. ix.

⑥ この点について特に興味のある人は、エリオットの評論集、殊に *The Sacred Wood* 1920, *Selected Essays 1917–1932*, 1932; *On Poetry and Poets*, 1957 を見られたい。

㊱ Cleanth Brooks: *The Well Wrought Urn*, A Harvest Book, 1947, pp. 215–216.

㊲ R. P. Blackmur: "A Critic's Job of Work" in *Form and Value in Modern Poetry*, A Doubleday Anchor Book, 1952, pp. 339–367.

㊳ John Wain: *Interpretations*, 1955, pp. 198–9.

㊴ J. C. Ransom: "Criticism, Inc." in *The World's Body*. Cf. Allen Tate: *Reactionary Essays on Poetry and Ideas*, 1936.

㊵ リーヴィスが一九三六年の自著の論文集を *Revaluations* と題したことは、この意識を表面に打出したものであろう。

㊶ アレン・テートは一九三六年の自著に題するに *Reactionary Essays on Poetry and Ideas* を以てしたのは、意味深長である。

㊷ C. Brooks: *The Well Wrought Urn*, 1947, p. 124.

㊸ *Ibid.*, p. 147.

㊹ *Form and Value in Modern Poetry*, 1952, p. 339.
Zabel: *Literary Opinion in America*, p. 770.

㊺ F. R. Leavis: *Revaluation: Tradition and Development in English Poetry*, 1936.
Allen Tate: *The Man of Letters in the Modern World*, 1936.

㊻ *Ibid.*, p. 20.

㊼ Crane: *Critics and Criticism*, 1952.

㊽ Spiller: *The Cycle of American Literature*.

㊾ O'Connor: *An Age of Criticism*; Stoval: *The Development of American Literary Criticism*.

㊿ 英語青年、昭和二十六年一月一日号参照。

(51) T. S. Eliot: *The Sacred Wood*, 1920, p. 1.

(52) *Op. cit.*, Ch. IV.

(53) Read: *Coleridge as Critic*, 1949 (*True Voice of Feeling*, 1953, pp. 157–188). D. G. James: *Skepticism and Poetry*, 1937. René Wellek: *A History of Modern Criticism, 1750–1950*; *Kant in England*, 1931.

(54) Coleridge: *Biographia Literaria*, ch. XXI.

(55) T. S. Eliot: *On Poetry and Poets*, 1957, p. 104.